

春まき・春植えの野菜

ダイズ（えだまめ）

えだまめは、未成熟なダイズの実のことである。連作に弱いので、2～3年周期の輪作にする。

●環境

日当たりと水はけのよい場所で育てる。低温にも高温にも適応できるので、比較的どこでも栽培が可能である。

●種まき

- ・種まきの適期は、4月中旬～5月下旬。
- ・種まきの2週間前に、畑に苦土石灰をまく。一週間前には、完熟堆肥と化成肥料をまいて、よく耕しておく。
- ・約20cm間隔で3～4粒ずつ点まきにする。

●世話

- ・種まきの直後や、発芽したばかりの時期に、鳥害を受けることがあるので、本葉が出るまで、防鳥ネットなどを使うとよい。
- ・本葉が出てきたら間引きをして、一か所二株にする。
- ・開花前に乾燥すると、花が落ちてしまうので注意する。
- ・追肥として、開花のころから株元に化成肥料を与えるようにする。

●収穫

えだまめとして収穫する場合は、さやが上から真ん中あたりまで膨らんできたころに、株ごと引き抜く。収穫時期が非常に短いので注意する。ダイズとして収穫する場合は、さやが黄色く熟してから収穫する。

●病害虫

害虫の被害が多く、特にシンクイムシ、カメムシ類などの害虫が発生しやすい。防虫ネットなどで防除する。

ピーマン

ナス科の植物で、気温が低いと育たない。夏の暑さには強い。連作に弱いので、4～5年周期の輪作にする。

●環境

日当たりと水はけがよく、肥沃な土壌が適している。

●苗の植えつけ

- ・植えつけの適期は、5月上旬～中旬。
- ・あらかじめ、畑に苦土石灰をまき、深めに耕しておく。
- ・畝の中央に約30cmの深さの溝を掘り、元肥として、1㎡あたり、堆肥と鶏ふんをそれぞれ1kg、化成肥料を一握り程度入れて、土を埋め戻す。
- ・株間を45～50cmにして植えつける。

●世話

- ・一番花の下から出るわき芽2本を残し、ほかのわき芽はすべて摘み取る。
- ・一番花の咲くころに、1m程度の支柱を立て、ひもで茎を固定する。
- ・一番果の収穫が終わったら、一回目の追肥として、化成肥料を施す。2回目以降は、草勢が衰えないように、2週間に一回程度行う。

●収穫

開花から収穫までの日数は、およそ15～20日。実が大きくなって緑色になったら、早めに収穫する。収穫せずに放っておくと、果皮が硬くなり、色も悪くなる。

●病害虫

ピーマンは比較的病害虫に強いが、栽培期間が長いいため、注意が必要である。アブラムシ、ハダニ、タバコガの幼虫などの害虫の被害が多い。

ミニトマト

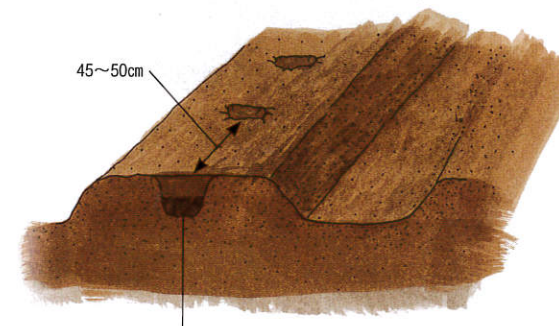
一般のトマトよりも育てやすい。種から育てるより、苗から育てるほうが、失敗が少ない。連作に弱いので、4～5年周期の輪作にする。

●環境

日当たりと水はけのよい場所で育てる。鉢やプランターでの栽培も可能である。

●苗の植えつけ

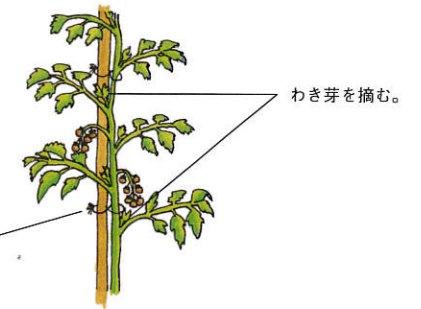
- ・植えつけの適期は、4月下旬～5月上旬。
- ・あらかじめ、畑に苦土石灰をまき、深めに耕しておく。
- ・畝の中央に溝を掘り、元肥として、1㎡あたり、堆肥1kg、化成肥料100gを入れて、土を埋め戻す。
- ・株間を45～50cmにして植えつける。



元肥。土とよくなじませ、埋め戻す。

●世話

- ・早いうちに肥料を与えると、茎や葉ばかりが成長してしまうので、植えつけた後は、しばらく追肥をしない。
- ・開花後、小さな実ができたなら一回目の追肥を行う。その後は、月に2回ほど、株元から少し離れたところに化成肥料をまく。
- ・草丈が20～30cmになったら支柱を立てる。
- ・葉のつけ根から出るわき芽は、小さいうちに摘み取る。
- ・ハダニを防ぐために、葉の裏にも水をかける。



●収穫

実が赤く色づいたものから順に収穫していく。

●病害虫

5～6月、梅雨にかけて疫病が発生しやすい。そのほか、青枯れ病・萎ちょう病などの病気にもかかりやすいので気をつける。アブラムシやハダニなどの害虫の被害が多い。

連作障害と輪作

同じ畑で何年も続けて同じ作物を育てると、生育が悪くなることがある（連作障害）。これを防ぐために、連作障害の出やすい作物は、何年かに一回のサイクルで育てる「輪作」をしたほうがよい。

●連作に弱い野菜と輪作の必要年限

- ・1年以上…オクラ
- ・2年以上…イチゴ、インゲン、ダイズ、ホウレンソウ、ラッカセイ、
- ・3年以上…キャベツ、キュウリ、ジャガイモ
- ・4年以上…エンドウマメ、スイカ、ナス、ピーマン、ミニトマト

●連作障害を防ぐために

- ・有機質肥料を十分に施して、土を耕しておく。
- ・前に作った作物の葉や根などを徹底的に取り除く。
- ・地表20cmぐらいの土と、その下の土を入れ替える「天地返し」を行う。

●連作するとよくできる野菜

カボチャ、コマツナ、サツマイモ、ダイコン、トウモロコシ、ニンジン
ただし、病害虫が多くなってきたら、土を休ませる。

ナス

ナスは比較的栽培が簡単で、土質にかかわらずよく育つため、たくさんの収穫が期待できる野菜である。連作に弱いので、4～5年周期の輪作にする。

●環境

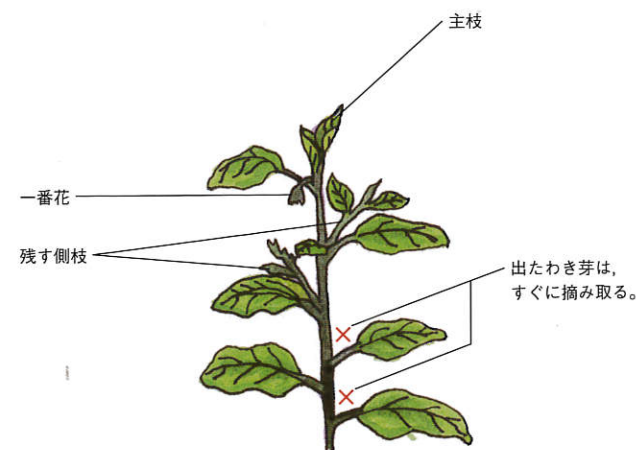
よく日の当たる場所で育てる。6～10月まで長く収穫できる野菜なので、有機肥料を多めにする。

●苗の植えつけ

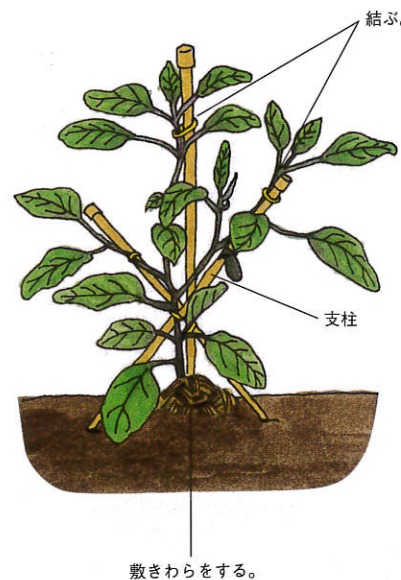
- ・植えつけの適期は、5月初旬。
- ・あらかじめ、畑に苦土石灰をまき、深めに耕しておく。
- ・畝の中央に約30cmの深さの溝を掘り、元肥として、1㎡あたり、堆肥と鶏ふんをそれぞれ1kg、化成肥料を一握り程度入れて、土を埋め戻す。
- ・株間を50～60cmにして植えつける。プランターで育てる場合は、長さ70cm程度のプランターに、約40cm離して二株植える。

●世話

- ・乾燥に弱いので、敷きわらをする。
- ・成長とともに枝がこんでくるので、一番花の下から出るわき芽2本を残し、ほかのわき芽はすべて摘み取る。



- ・ナスの枝は、実がつくと重みで垂れ、地面についてしまうことがある。枝が伸びたら、しっかりと支柱を立てて、ひもで結ぶ。



- ・実がついたら、2週間に一回、化成肥料を与え、軽く土寄せする。

●収穫

6月ごろから徐々に収穫できるようになる。初めのうちは、実が若いうちに収穫する。枝がこみ合って日当たりが悪くなると、果実の質が落ちるため、秋ナスを収穫したい場合は、7月下旬ごろに、すべての枝を株元から3分の2程度の高さになるように切り詰め、液体肥料をたっぷりと与える。

●病虫害

ニジウヤホシテントウやアブラムシの被害が多い。真夏にはハダニが発生するので注意する。

キュウリ

葉が大きく、根を浅く広く張るので、水をたっぷりと与える必要がある。つるは早めに支柱へ導き、こみ入ってくる葉を整理しながら育てる。連作に弱いので、3～4年周期の輪作にする。

●環境

日当たりがよく、風通しのよい場所で育てる。大きな鉢やプランターでも栽培できる。

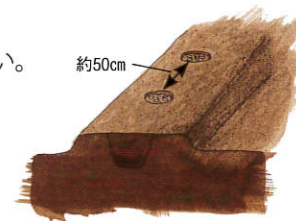
●苗の植えつけ

- ・植えつけの適期は、4月上旬～5月上旬。
- ・植えつけの2～3週間前に、畑に苦土石灰をまき、耕しておく。
- ・元肥として、1㎡あたり、堆肥1kg、化成肥料100g程度をすき込む。
- ・株間を約50cmにして植えつける。

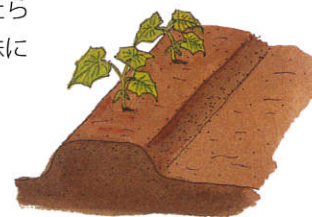


★直まき

畑に直接種をまいてもよい。約50cm間隔で3～4粒ずつ点まきにする。

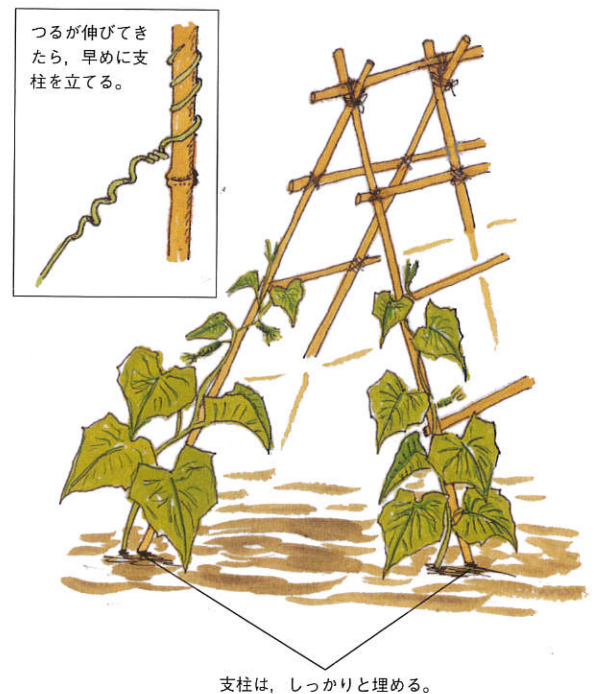


本葉が2～3枚になったら間引きをして、一か所一株にする。



●世話

- ・肥切れしないように、月に2～3回、化成肥料を与える。
- ・つるが40～50cmぐらいまで伸びたら、先端を摘み取る。
- ・キュウリは、巻きひげを伸ばして物に巻き付き、風の影響を和らげている。つるが伸びてきたら、早めに支柱を立てる。
- ・黄色くなった葉や茂ってこみ合ってきた葉はカットして、風通しをよくする。



●収穫

キュウリは実が大きくなりすぎると、味が落ちるので、花が咲いてから約一週間のうちに収穫する。

●病虫害

キュウリは病虫害の多い野菜である。梅雨の時期は、べと病、炭そ病に気をつける。また、害虫では、アブラムシやウリハムシが発生しやすい。

オクラ

花のあとにできる若さを食べる。フヨウに似た美しい花をつける。連作に弱いので、1～2年周期の輪作にする。

●環境

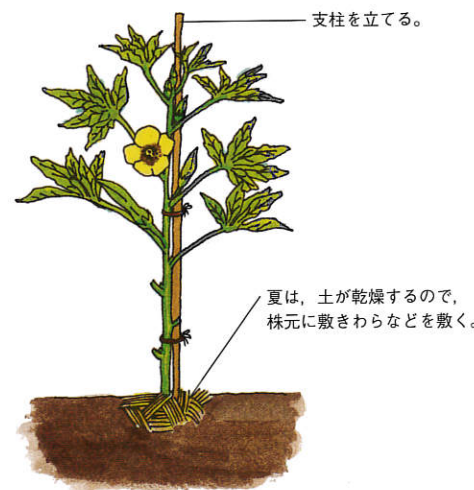
熱帯性の野菜なので、高温を好む。日当たりのよい場所で育てる。

●種まき

- 種まきの適期は、4月下旬～5月上旬。
- 種まきの2週間前に、畑に苦土石灰をまき、深めに耕す。一週間前には、完熟堆肥と化成肥料をまき、よく耕しておく。
- 40～50cm間隔で5～6粒ずつ点まきにする。

●世話

- 発芽後に間引きをして一本立ちにする。
- 乾燥に弱いので、敷きわらをする。
- 花が咲いたら、2週間に一回、一株に一握り程度追肥する。



●収穫

開花後七日程度、さやが5～8cmになったら収穫する。収穫が遅くなると硬くなるので注意する。
収穫したさやの下葉を2枚残して、それより下の葉を摘むと、次々とよいさやが実りやすくなる。

●病虫害

病気は苗立ち枯れ病、害虫はアブラムシやハマキムシに注意する。

インゲン

「つるあり」と「つるなし」の品種がある。つるありインゲンは長く収穫でき、つるなしインゲンは早く収穫できる。連作に弱いので、2～3年周期の輪作にする。

●環境

水はけのよい肥えた土地であれば、どこでも育てることができる。

●種まき

- 種まきの適期は、4月中旬～6月下旬。
- 酸性の土壌に弱いので、種まきの2週間前に苦土石灰をまく。一週間前には、完熟堆肥と化成肥料をまき、よく耕しておく。
- 一畝に2列、2～3粒ずつ、つるありの品種は30～40cm、つるなしの品種は20～30cmの株間で点まきにする。

●世話

- 発芽後、本葉2～3枚のころに間引きをして、一か所二株にする。
- つるありの品種には、つるが10cm以上伸びてきたころに80cm以上の支柱を立てる。つるなしの品種には、支柱は必要ない。
- 花が咲き始めたら、2週間に一回、化成肥料を株周りにまく。
- 夏場に乾燥すると、花が落下しやすくなるので、十分に水を与え、敷きわらをして乾燥を防ぐ。

●収穫

開花から10～15日後、さやが硬くならないうちに収穫する。あまり長く収穫しないでいると、株自体も弱ってしまう。

●病虫害

病気はモザイク病、害虫はアブラムシ、ハダニに気をつける。

サツマイモ

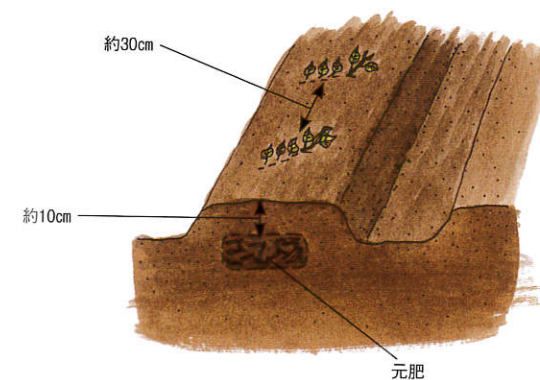
丈夫なイモで、あまり手をかけずに育てることができる。

●環境

日当たりと水はけのよい場所が適しているが、土壌への適応性が優れているので、どのような場所でも育てることができる。

●苗の植えつけ

- 植えつけの適期は、5月中旬～6月中旬。
- 植えつけの1～2週間前に畑をよく耕す。畝の中央に溝を掘り、元肥として、草木灰、堆肥、腐葉土などを敷き詰め、その上に10cmぐらいの土をかけておく。石灰は使用しない。
- 苗は切り口を一晩水につけておく。
- 株間は30cm程度。6～7cmの深さの溝を掘り、苗が水平になるように植えつける。葉と苗の先端部分が、土に埋もれないようにする。



●世話

- つるが長く伸びる前に、雑草を取る。
- イモに光が当たると生育が悪くなるので、崩れやすい畝では、しっかり土寄せをする。
- 伸びたつるが根を張り、そこから小さなイモが成長し始めると、成長が分散してしまうため、つるが伸びすぎたら、伸びたつるを反対方向に返す（つる返し）。

●収穫

10～11月ごろ、一株掘って、成長具合を確認してから行う。最初につるを刈り取ると収穫しやすい。

●病虫害

根を食べるコガネムシの幼虫に注意が必要である。

トウモロコシ

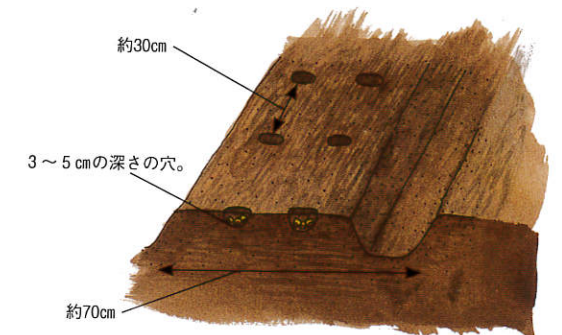
他家受粉（ほかの株の花粉と受粉する）なので、2列以上で栽培する。畑に直まきする。

●環境

日当たりのよい場所で育てる。

●種まき

- あらかじめ、畑に苦土石灰をまき、深めに耕しておく。
- 元肥として、1㎡あたり、堆肥2kg、化成肥料200g程度をまき、土によくすき込んでおく。
- 約30cm間隔で3～5cmの深さの穴を掘り、3～4粒ずつ点まきにする。発芽の促進のため、種は、一晩水につけておく。
- 種まき後にマルチングをすると生育が早く、鳥などに種を食べられることもない。



●世話

- 本葉が1～2枚のころに間引きをして、一か所二株にする。そして、草丈が30cm程度になる前に一本にする。
- 草丈が30～40cmになるころから、月に一回、株の両側に化成肥料を一握りずつまく。
- 草丈が高くなるので、こまめに中耕と土寄せをする。
- 雌穂が出てきたら、上部の1～2本を残して摘み取る。
- 頭頂部の雄穂から花粉が出たら、株を揺らして受粉を促す。

●収穫

雌穂の毛が出てから約20日後、毛がこげ茶色になったころが収穫の適期。外から触って実がつまっていたら収穫する。

●病虫害

雄花が出始めたころ、アワノメイガの被害を受けやすい。